

11. 早期胃癌の予後と診断

○高杉敏彦, 森山紀之, 山田達哉
(国立がんセンター・放射線診断部)

早期胃癌の予後を正しく把握することは、術前診断のみならず、術後の follow up の面で極めて重要なことである。国立がんセンターにおいて治癒切除された単発早期胃癌732例を対象に、Life Table Method により累積生存率を算出し、その予後を検討した。

結論：1) 深達度 Sm の早期胃癌では、5生率95.3%, 10生率93.1%であり、深達度 m の早期胃癌では5生率100%, 10生率99.5%であった。2) 早期胃癌においてもリンパ節転移陽性群の予後は陰性群に比べて明らかに悪く、再発死亡はすべて5年以内に認められた。3) 術後9年目まで癌の再発死亡が認められた。従って、早期胃癌の治癒判定には少なくとも10年の経過観察が必要である。

12. 運動負荷時心拍数の指数回帰による評価

○角田興一 (千葉市健康増進センター)
上村加代子 (千大)

エルゴメータ負荷にさいする心拍数の変化をシミュレーション回帰 (実験的回帰分析) してみた。5分間の一段定量負荷にさいし、心拍数は①運動開始より急増し、② steady state に達すると直線的に漸増しつづけ、③運動の中断により急減ついで漸減するが、①と③の部分に関しては、 $\text{心拍数} = A \cdot e^{-\frac{1}{B} \cdot t} + C$ (A, B, Cは定数, e は自然対数の底, t は時間) という近似が可能であり、心拍数の増加・減少過程について時定数の概念を導入しうる。

健常多数例について定量負荷後の心拍減少過程にかんする時定数をみると、(同一の最大下負荷時心拍数を示す場合でも) performance の優れた者の方が時定数が小であることを見得る。

13. CAG 施行例に臨床的検討—特に ECG パターンとの比較

○高橋道子, 下浦敬長, 平井 昭
(千葉市立)

当院にて、S. 52年9月よりS. 53年11月までに施行した、冠動脈造影、左室造影の15例について検討した。結果：①心筋硬塞では前壁を除き、心電図より主要冠動脈枝を予測するのは難かしかった。特に、比較的若干の

下壁硬塞で、正常 CAG が2例あった事が注目される。②労作性狭心症では、重症の血管病変が予想され、是非冠動脈造影を行うべきである。③異型狭心症では、2例ともに、有意の冠動脈病変を有した。④左室造影では、前壁硬塞で100% asynergy を認めた。

14. HDL と虚血性心疾患

○永瀬佳子, 仲野敏彦, 森崎信尋
白井厚治, 与儀 裕, 佐藤重明
有賀 光 (川鉄病院)

桑島敏江, 加藤徳太郎 (同・検査科)

1977年の Framingham Study 以来、HDL は虚血性心疾患との相関性を指摘されてきた。当病院でも350例で HDL-cholesterol を測定、結果を検討し、心筋硬塞で有意の低下、虚血性心疾患と CVA で低下傾向を得た。心筋硬塞患者各々では他の risk factor のない患者でも HDL-cholesterol に有意の低下をみた。各 risk factor の出現率をみると他は50%以下だが、HDL-cholesterol では100%であった。虚血性心疾患の予防や治療の可能性を HDL-cholesterol 値の改善に結びつけて考えてみた所、脳塞栓症の一症例で SK-1 投与による著明な HDL-cholesterol の上昇をみたので併せて報告した。

15. UCG 及び頸動脈波による虚血性心疾患の心機能測定を試み

○宇高義夫, 杉林昭男 (国立習志野)

我々は非観血的な心機能測定法として Weissler 法による頸動脈派の STI と UCG による左室壁 (中隔・後壁) の動きをもって虚血性心疾患の心機能を推察した。①前壁中隔硬塞に対して言われている中隔と後壁の動きが必ずしも逆相関と言えぬ例も少なくなかった。②中隔偏位と後壁偏位との比を示す SE/PWE は中隔の paradoxical movement の程度と正の相関を示した。③SE/PWE は頸動脈波からの PEP/ET と正の相関を示す成績を得たが、広汎前壁硬塞では中隔の動きの著明な低下のためか相関を示さなかった。

16. 虚血性心疾患と左心機能および左室動態について、とくに亜硝酸アミル負荷による検討

○下浦敬長, 高橋道子, 平井 昭
(千葉市立)

虚血性心疾患の左心機能および左心室壁動態に及ぼす亜硝酸アミルの影響を検討した結果、